

単元づくりの手法を全校で共通化し、 学校・地域のカリマネを推進

栃木県那須塩原市では、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、教員の授業観を見直してもらおうと、単元計画を作成し、それに基づいた授業づくりを推進する「なすしおばら学び創造プロジェクト」を実施している。指導主事もチームに加わり、単元づくりの手法を示すことで、各校のカリマネの実践を支援している。

栃木県 那須塩原市 プロフィール

◎栃木県北部に位置し、多くの名湯や塩原溪谷、沼ッ原湿原などの観光名所を有する。酪農も盛んで、生乳の生産額は本州1位（全国4位）を誇る。2017年度に義務教育学校として開校した塩原小中学校を始めとして、全中学校区で小中一貫教育を実施している。

人口 約11万6,000人 面積 約593km²
 公立学校数 小学校20校、中学校9校、義務教育学校1校
 児童生徒数 約9,300人
 電話 0287-37-5349（学校教育課）
 URL <http://www.city.nasushiobara.lg.jp/42/006261.html>

那須塩原市教育委員会の施策

単元づくりの考え方・手法を実践の中で学ぶプロジェクトを実施

プロジェクトの概要

単元づくりの手法を示し、 授業の見直しを促す

「人づくり教育」を進める栃木県那須塩原市では、2015年度から、全市立小・中学校で「なすしおばら学び創造プロジェクト」を実施している。これは、子どもたちの資質・能力を日常の授業の中で育むための単元づくりや授業づくりの手法を、教員が実際に取り組みながら習得し、授業改善を促すプロジェクトだ。大宮司敏夫教育長は、そのねらいを次のように語る。

「新学習指導要領解説の総則編で述べられている『主体的・対話的で深い学び』は、1時間の授業ですべてを実現できるものではなく、単元や題材のまとまりの中で実践していくものです。そのためには、子どもたちに『何を教えるか』という学びの内容とともに、『どのように学ばせるか』という学びの過程にも、これまで以上に意識を向ける必要があります。

そこで、どの教員にも、そうした観点で自身の指導を見直してほしいと考え、教育委員会として授業改善の手法を示し、各校を支援することにしました」

同プロジェクトの進め方は、次の通りだ。まず、那須塩原市教育委員会（以下、市教委）の指導主事が各校を訪れ、研究する教科と単元を決め、それに取り組む教員のチームをつくる。チームで議論して単元全体の構成案「単元デザインシート」を練り上げ、その構成案の中から1時間分を取り上げて研究授業を行う。そして、研究授業後には、チームで授業の成果と課題を検証し、その後の単元づくりや授業づくりの改善に生かしていく（図1）。

チームのメンバーには、該当校の教員と、担当の指導主事のほかに、同じ中学校区内の他の小・中学校の教員も加わることにした。中学校区ごとに小・中9年間の学びの連続性や系統性を意識しながら単元づくりを行うことによって、地域全体のカ



教育長
大宮司敏夫

だいがうじ・としお

栃木県公立小学校・中学校で19年間教壇に立つ。その後、指導主事、管理主事を経て、那須塩原市立西小学校校長、那須塩原市教育委員会

学校教育課長、栃木県教育委員会事務局那須教育事務所長などを歴任し、2012年度から現職。



学校教育課
英語教育推進室
副主幹・指導主事
遠藤克朗

えんどう・かつあき

栃木県公立小学校教諭を経て、2017年度から現職。

リマネの推進にもつなげている。

プロジェクトの詳細

単元計画に必要な要素を 「構想メモ」で整理

2018年度からは、「単元デザインシート」を構想する際に「単元デザイン構想メモ」（P. 14図2）を活用

して、単元計画時に考えるべき様々なことを整理できるようにした。

まず、「その単元で身につけさせたい資質・能力」を明確にし、「その単元で学ぶ内容」を整理する。次に、「身につけさせたい資質・能力」の習得のために、各授業時間の場面で、どのような学習形態（クラス [一斉]・グループ・個人）にするか、教材や教具は何にするかといった学習方法や手段を考える。

「単元計画の作成で大切にしているのは、最初に単元のゴールを設定してから、各時間の授業を設計することです。これにより、ゴールから逆算して、その授業時間では何のために、その学習形態で子どもたちに学ばせるのか、それぞれの教育活動のねらいや関係が明確になります。また、単元全体の見通しを立てることで、例えばある授業では話し合い活動にたっぷり時間をかけ、次の授業では一斉授業を行うといったように、思い切った時間配分が可能になります」（大宮司教育長）

さらに、同市では家庭学習を「究極の個別学習」として位置づけ、「単元デザイン構想メモ」にも組み込んでいる。例えば、子どもに家庭で事前学習をさせた上で授業に臨ませることで、授業では知識を教える時間を減らし、グループ学習の質と量を高めることができる。そのように、授業と家庭学習を関連させた単元づくり・授業づくりを意図的に行っている。

そうして、「単元デザインシート」と「単元デザイン構想メモ」によって、単元づくりや授業づくりの方法を市内全校で共通化。中学校区単位で授業改善を図る仕組みを整えることで、地域や学校が育てたい児童・生徒像を中学校区で共有し、その実現に向けた方法のベクトルもそろえられるようにしている。

なお、「単元デザインシート」「単

図1 「なすしおばら学び創造プロジェクト」のステップ

| ステップ | | 内容 |
|--------|-------|---|
| Plan | | 学校と担当指導主事との打ち合わせ |
| | | プロジェクトの進め方について確認。該当校の学校課題や学習指導・児童生徒指導上の課題を勘案しながら、研究教科、チームやチームリーダーを決める。 |
| Do | 2か月前 | 単元構想案着手 |
| | 研究授業前 | 研究授業を実施する単元をあらかじめ決める。一単元全体の構成を考えることを重視し、「単元デザインシート」を基に話し合う。指導主事や授業力向上委員、同じ中学校区の教員も参加。 |
| Check | 当日 | 授業プランの作成と単元構想案の練り直し |
| | | チームリーダーを中心に、協働体制で単元プランを練り直したり、プレ授業を行ったりして、よりよい単元のデザインとなるよう工夫・改善する。 |
| Action | 研究授業後 | 研究授業 |
| | | 授業研究会 |
| | | 授業研究会の進行はチームリーダーが行う。視点を絞って協議し、単元全体の構成や授業展開を振り返る。 |
| | | 研究授業終了後も、チームの学びを各自の授業に生かして授業構成を行い、研究教科にとどまらず、多くの教科、領域の授業づくりに応用して、授業改善を図る。 |

*那須塩原市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

元デザイン構想メモ」はすべて、市の校務支援システムに公開。他の教科・単元の単元計画を練る際にもそれらを参考にできるようにして、教科を横断した授業改善を支援している。

成果と展望

教員一人ひとりのカリマネ実現を支援

同プロジェクトは、2018年度までに市内の公立小・中学校、及び義務教育学校の全30校が実施した。4年間の取り組みの最大の成果は、教員の意識の変化だ。どの学校でも、自ら創意工夫しながら、主体的に単元づくり、授業づくりに取り組むようになった。子どもの成長に結びつく学びのあり方について、チームで議論を重ねながら1つの形にしていくなかで、多くの教員がやりがいを感じているという。

とりわけ、若手教員に大きな成長が見られると、学校教育課の遠藤克

朗副主幹は語る。

「特に、若手教員が自ら手を挙げて研究授業の授業者になるケースが多くありました。同じチームのベテラン教員や指導主事が支援するので、指導力向上のチャンスとして積極的に取り組めるのだと思います」

カリマネは、教育委員会や学校レベルだけではなく、現場の教員が日々の授業の中で実践できていることが重要になるが、「なすしおばら学び創造プロジェクト」の実践は、教員がそのための意識を高め、ノウハウを身につける場になったといえる。

2019年度からは、「なすしおばら学び創造プロジェクト」の第2ステージとして、「単元デザイン構想メモ」を用いた単元づくりと授業づくりをより日常的なものにすることを目指す。

「第1ステージを通じて、教員はカリマネにどのように取り組めばよいのかを理解できたと思います。第2ステージの目標は、カリマネのさらなる浸透を図っていくことです。新

しい単元に入る時には、『単元デザイン構想メモ』を用いて単元づくりと授業づくりを行い、単元が終わった

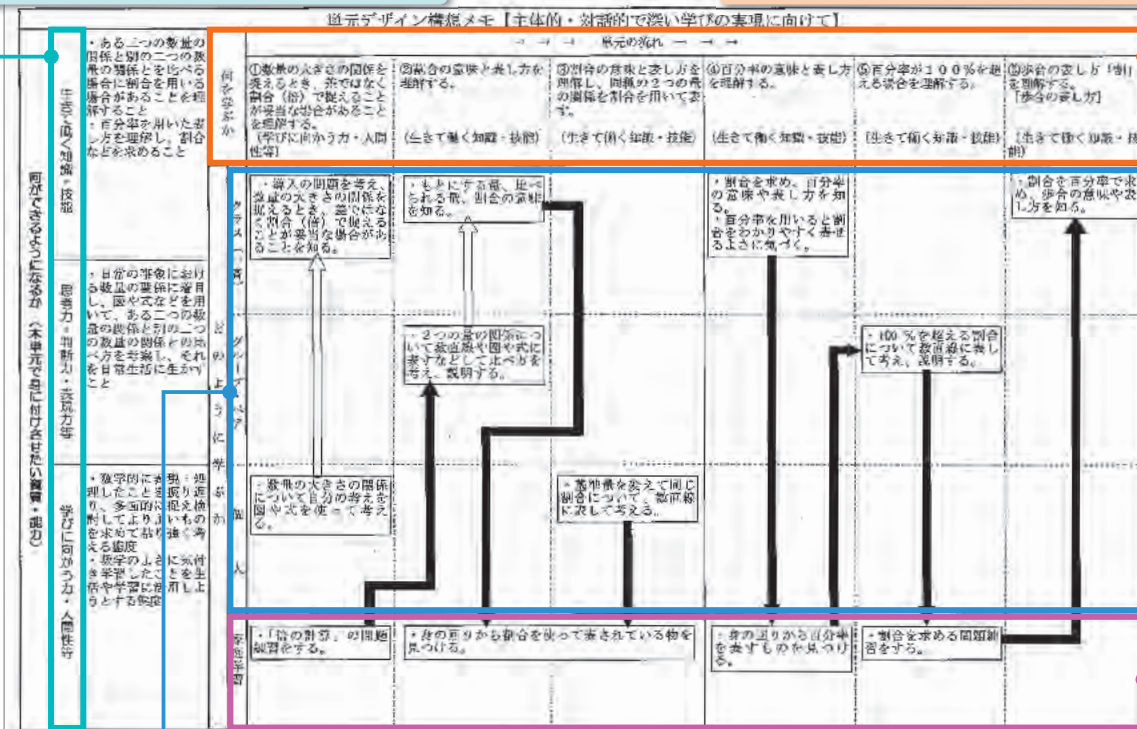
時には、取り組みを振り返り、その後の授業改善に結びつけていく。これを、本市のすべての小・中学校、

及び義務教育学校の日常的な光景にしていくことを目指していきます」(大宮司教育長)

図2 「単元デザイン構想メモ」と実践のポイント(抜粋)

本単元で身につけさせたい資質・能力を記入します。その際、新学習指導要領の趣旨に沿って、「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱に基づいて整理し、記入します。(後略)

(前略) 学習の流れは、児童生徒の思考の流れを想定して設定します。教科書の配列や指導書の扱いにこだわらずに、目の前の児童生徒が効果的に学ぶことができ、また、興味深く考えることができる配列になっているかを教員が自問自答して構成します。



単元時間ごとに授業の流れを具体的に記入します。その際、中心となる学習活動を有効なものとするために、一斉・グループ・個人といった、どのような学習形態で行うのかも記入します。(中略) 学習のねらいが達成されるように、対話的な学びにつながる学習法・学習形態・教材・教具の活用を工夫します。

各単元時間の学習と家庭学習を意図的につなぎ、児童生徒が事前に調べたり、考えたりするなどして、自分の意見をしっかりと持った上で次の時間に臨めるように工夫します。そうすることで、授業中に十分に考え、議論し、他者と交流することができます。

市教委では、「単元デザイン構想メモ」のフォーマットと、それを作成する手順と留意点を示すことで、各校が単元のまとまりの中で子どもたちが効果的に学びを深めていくために、何を学ぶかを整理し、どのように学ばせるのかを考えやすくした。

* 那須塩原市提供資料を基に編集部で作成。「単元デザイン構想メモ」は、西小学校の5年生の算数「割合」のものをそのまま掲載。

那須塩原市立西小学校の実践

「構想メモ」を基にした単元づくりで授業観が徐々に変化

プロジェクトの取り組み方

経験や立場のバランスを配慮したチームを結成

那須塩原市立西小学校が「なすしおばら学び創造プロジェクト」を始めたのは、2018年度のことだ。前任校でも同プロジェクトを実施して

いた木村加容子校長は、次のような成果を期待した。

「本プロジェクトのよさは、自校の教員だけでなく、指導主事や他校の教員もチームに加わり、一緒に単元づくり、授業づくりをすることです。教職歴や立場を超えて多様な視点から話し合うことで、参加者一人ひと

りが多様な気づきを得ることができ、本校でも、本プロジェクトを通じて、教員の視点や意識が大きく変わることに期待しました」

同校では、6年生の国語、5年生の算数、3年生の理科、特別支援学級の自立活動の4チームを結成。全教員がいずれかのチームに入ること

とした（写真）。

「チームづくりでは、教員の希望を基に、若手、中堅、ベテランの教員をバランスよく配置するようにしました。国語と理科では、研究授業の授業者にいずれも20代の教員が手を挙げました。若手教員を経験豊かなミドルリーダーやベテラン教員が支援するというチーム体制ができました」

単元づくりの話し合いが始まったのは、夏季休業に入ってからだ。子どもの実態を基に、「単元デザインシート」を作成し、どのチームも数回のミーティングを行って、「単元デザイン構想メモ」を練り上げていった、そして、11月に研究授業を行った。

その検討過程で、教員の授業観が徐々に変化していった。

「これまで先生方は、1時間の授業をどうするかを中心に考えてきました。1時間の中に、様々な学びの方法（一斉、グループ、個人）を取り入れることが多くありました。それが、『単元デザイン構想メモ』で、単元づくりや授業づくりの考え方が示され、それを基に単元や授業の構成を考えるうちに、例えば単元の前半は一斉授業を中心とし、後半はグループ学習や個人学習を中心とするといったように、『その単元でどんな資質・能力を身につけさせたいのか』という目標や、子どもの学習の状況に合わせて、『どのように学ぶか』も学びの方法も変えていく必要があることを理解していきました」（木村校長）



写真 理科チームの話し合いの様子。指導主事がチームに入ることによって、教育委員会が身近に感じられ、現場が教育委員会に相談しやすくなるといった効果もあるという。



◎ 1888（明治21）年設立。「あいさつ・返事・あとしまつ さわやか笑顔の西小っ子」を西小スローガンとして掲げ、目標に向かって前向きに努力する児童の育成を図っている。

校長 木村加裕子先生
児童数 285人
学級数 15学級（うち特別支援学級3）
電話 0287-36-0243
URL <http://www.city.nasushiobara.ed.jp/es-nishi/>

成果と展望

単元の見通しを示すことで 子どもの学ぶ姿勢にも変化が

同プロジェクト終了後の教員の振り返りには、「単元のゴールを明確にすることで、1時間ごとの授業の構想がはっきりすることが分かった」「『今まで学習してきたこと』と『これから学習すること』を見通した上で、授業を構想することの大切さを学んだ」といった声が上がった（図3）。

「1時間ごとの授業で何をするかを考える前に、単元全体を見通すことの大切さに、多くの先生方が気づいていました」（木村校長）

教員が単元全体の見通しを持って授業を行うことによって、子どもの学びに向かう姿勢にも変化が見られ



校長 木村加裕子

きむら・かよこ

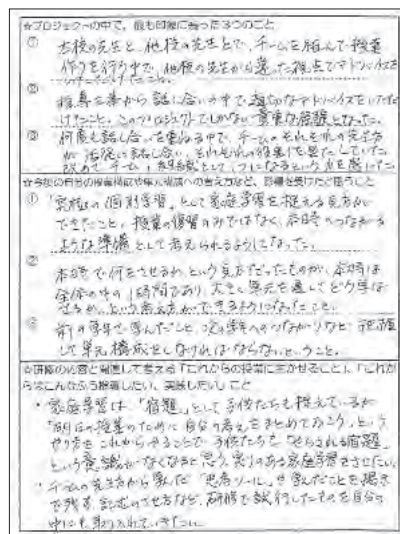
栃木県公立小学校教諭、
教頭を経て、2018年度
から現職。

ている。単元構想を示すことで、子ども自身が、「この学習は何のためにしているのか」「この時間の学習がどこにつながっていくのか」を理解し、見通しを持って意欲的に授業に臨むようになった。また、単元の振り返りでは、単元を通して自分は何ができるようになったのかを書けるようになってきた。授業の進度に合わせて、子どもが自分で考えて復習したり、調べ学習をしたりと、家庭学習にも変化が見え始めたという。

そこで同校では、2019年度は算数を研究教科とし、引き続き「なすしおばら学び創造プロジェクト」の手法で、チームで単元づくりや授業づくりに取り組んでいる。

「何よりうれしいのは、子どもたちが意欲的に生き生きと学ぶ姿や、できるようになった姿を見ることです。『なすしおばら学び創造プロジェクト』の実践を通して見られた子どもたちの変容は、教員の意欲につながっています。教員の第一の仕事は授業です。授業改善がカリマネの第一歩と考えたと、カリマネを進めるためには、働き方改革を行い、単元づくりや授業づくりに一層時間を充てられるようにしたいと思います」（木村校長）

図3 教員の振り返り



教員の振り返りでは、「単元を見通した考え方ができるようになった」という声が目立った。

* 西小学校提供資料をそのまま掲載。